

未だ安心はできないけれど、今まで過ごしてきた普通が
いかに大切に幸せなことだったかを気づかされる1年でした。

様々な制限の中、1年遅れでオリンピック・パラリンピックが開催され、たくさんさんの感動を与えられました。コロナでなければ…と思わないこともありませんでしたが、今の情勢でこそその感動もありました。

今年でカシミア工場を山梨から岩手へ移転して10年になりました。
リンキングができる職人さんを「山梨へ来てほしい」とお誘いし断られ…結局工場を岩手へ移すことにしました。無謀な決断をしたと思いましたが北上の地に暖かく迎えられ、今では英断だったと心から言えます。



【岩手工場10周年】
職人さんを求めて 山梨から岩手へ

大好きなカシミアを追求し、世界トップのブランドにしたい。そのためにはほかの素材をすべて諦めて、カシミアに特化するしかない。

また、お客様にピッタリのサイズで、お好みの色のニットを短期間で作り提供したい。そんな世界中でどこもやっていないことをやるにはどうすればいいか、自分なりに研究しました。

結局、自分で工場を持つしか実現することはできないとわかり、無謀にも山梨で自社工場を始めたのが2005年でした。

後ろ盾のない貧乏会社では、経済的に苦しいことはかりでした。中でもどうにもできなかったのがリンキングというニット特有の縫製工程でした。そのリンキングが立き所で赤字が重なり、工場を閉鎖する決心をした矢先に舞い込んできたのが、岩手のリンキング職人さんの話でした。東日本大震災で閉鎖が決まったニット工場へ、山梨行きを勧めに行ったことが転機となりました。

潮目が変わった工場移転

岩手県北上市に移つてすぐに及川副市長が工場へいらつしやいました。こんなちつぽけな工場に市役所の方、しかも副市長さんが直々に歓迎と激励に来てくださるとは、まったく想像外でした。

被災して間もない東北、歓迎してくださっているこの地に役立ちたいけれど、うちの二

ツトが本当にお役に立てるのかまったく自信がありませんでした。が、移転を機にメインの販売先を今までのブティックや百貨店、OEMから一般のお客様へ方向転換したことで潮目が変わりました。岩手はラッキープレイスだったのです。

10周年の今では、北上市のふるさと納税の返礼品としてたくさんの方に「愛用いただき、市の増収にも少しはお役に立てている」とに喜びと誇りを感じています。

社員一同、益々発展できるよう日々の努力を重ねていきます。
今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

【2020〜21 ふるさと納税】

岩手県北上市のふるさと納税の返礼品として多くの寄附者の皆様からUTOカシミアをご用命いただき、昨年の寄附額は2億5千万円を上回り、8年目を迎えた今年まで累計寄附額13億円を超えました。
ご寄附いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。



【毎日、カシミア暮らし】 カシミアニット×暮らしの話

カシミアは幸せのご馳走

はじめまして、UTOの片山と申します。これまでの社長に代わり、このエリアだけ執筆することになりました。楽しんでお読みいただけたら幸いです。
初回は『カシミアとの出会い』を書きました。

カシミアはお金持ちの為の素材

長野県の村出身の僕は、幼少期から大学を卒業して社会人になってからも、カシミアは大人の、もっと言うとお金持ちのための素材だと思っていました。
なんだかふわふわして軽くて肌触りが良いだけで、20代の僕にとっては全く必要でない機能性で値段はべらぼうに高い。量産品のウールだってそれなり的高级感はあるし、重いけどそれを差し引いてもウールで充分だ。

これをお読みになっている皆様も、同じような思いを抱いたことはありませんでしたか？
そんな風に、カシミアの特徴は知っていても全く興味がなく、ましてや身に着けたこともありませんでした。

学生時代からニットを手編みする機会が何度かあり、気づけばニットが好きでニットの仕事をしたいところ、UTOに出会い、宇土社長に拾われました。
年中カシミアニットだけを作っているUTO。触れたこともないカシミアの猛烈強、PR・商談に活かす日々、だけど知識はやっぱり知識。「最高級のカシミアニットは良い」ということを頭ではわかっていても惹きつけられるほどの興味は持てませんでした。

そこで、一度会社にあるカシミアを試着してみることになりました。

「軽くて肌触りがすごく良い」…ただそれだけでした。思っていた通りだったので、少しも感動しませんでした。そもそもカシミア自体をまったく触ってこなかったの、他と最高級のカシミアの違いに感動することはありませんでした。「なるほど、これが噂のカシミアかあ」ぐらい。(笑)

幸せな素材 感じる素材

入社して半年後のある日「天使のマフラーを実際に着用して、風合いの変化を調べたい」と、実験用としてマフラーと、その後社長のお下りのセーターをいただきました。試着ではなく、実生活でカシミアを着る初めての体験のスタートです！



晩秋の箱根を訪れた際に事故で箱根登山鉄道が停まってしまい、枯葉の舞う山道を歩く機会がありました。そのときに着ていたカシミアの肌触りは、今でも忘れることができません。カシミアという素材がこんなにも長く愛され続けている意味を、身をもって体験することができました。

化学繊維のほが機能面で優れているとされている今の世の中です。綿よりポリエステル、ウールよりアクリル。それに対して、カシミアの肌触りもあたたかさも軽さも、すべて五感、触覚で感じるものです。吸水性などで仮に化繊に劣っても、箱根での体験のような、その人しか体験できない、言葉にできないエピソードのぬくもりが、幸せを生みだしてくれます。

あと体験といえは、やはり実生活の中で感じる。カシミアだったただ店頭で触って終わりではなく、まず寒い日に身に付けて外に出てみる。そこで初めて本当のカシミアに気づくことができます。

自分でその軽さやあたたかさを感じて、幸せを感じる。自分のための素材「カシミア」。
社長はそのことを「幸せのこころ」なんて言い方をしますが、食事や「自分の満足のための贅沢な料理」ですが、カシミアもまた同じ、という表現です。なんだか素敵じゃないですか？僕は本当のカシミアを知ってからまさにそうだな！と思い、UTOを紹介するときに一番使う大好きな言葉です。

カシミア100% レディース
ベルト付き ミラノリブワンピース
1112-1422 ￥121,000(税込)



お部屋で着たいワンピースとして。上質のカシミアを贅沢に使用した、軽やかで程よい肉厚のミラノリブ編みのベルト付きワンピースをお作りしました。首はハイネックデザイン、適度にゆとりあるシルエットは体型カバーをしつつ、ベルトを付ければシェイプされたウエストが大人らしい上品な印象になります。

カシミア100%
天使のリブストール
1312-3254 ￥44,000(税込)



度触れたら手放せなくなる、最高級カシミア100%のふわっふわの肌触り。空気を含むようにふんわり甘めにリブ状に編み、やわらかで優しい印象のリブ編みです。無地(天竺編み)しかなかったUTOロングセラー『天使のストール』に、初めて『編み模様の入った天使のストール』が加わりました。

カシミア100%
リンクスボーダー編みネックウォーマー
ニマーレグウォーマー



さ38cm×幅31.5cm
カシミアをボリューミーに編んだ、ゆったりした贅沢なサイズのネックウォーマー。最高級カシミアをふんわり編み、手放せなくなるような極上の肌触りです。とっても軽く、敏感肌の方にもおすすめです。冷え込む季節のおともにかがでしょうか。

長さ38cm×幅31.5cm

世界一のカシミヤを作りたい(II)

カシミヤとニットの話 * (七十)

長年の念願が叶ってカシミヤの故郷を訪れたのは、プロの間で世界一と評されるアラシヤンカシミヤが獲れる、中国・内モンゴル自治区のアラ善(アラシヤン)左旗地区。5月末のアラ善は春たけなわの頃でした。アラ善へは日本から北京へ飛び、乗り換えでさらに西の内陸へ飛行機で約2時間。銀川(インチヨワン)が一番近い街です。

銀川は寧夏回族自治区の州都。チンギスハーンの頃は西夏王国がありました。黄土高原に近く黄砂の源のような処ですが、黄河の中流域ために水も産物も豊かな街です。

銀川出発の朝。昨日まで近くの建物も見えないぐらい厳しい黄砂も止み抜けるような晴天の元、万が一に備えかなりの量の水のペットボトルを車に積み込みいざ出発！

銀川の街を外れると荒涼とした半砂漠で、その中を頼りなげに走っている一本の舗装道路を内モンゴルとの境の賀蘭(ホーラン)山脈に向かつてひた走ります。

山々は樹木が全く無く、僅かに草や灌木が生える半砂漠で、両側は地平線の彼方に山々が連なる広大な大地です。

寧夏回族自治区と内モンゴル自治区を分ける賀蘭山脈の中腹に差し掛かると崩れかけた万里の長城が現れ、つくづく遠くまで来たことを実感します。

1600メートルの峠を越え内モンゴルに入るとアラ善(アラシヤン)左旗です。とうとうアラ善まで来たと、感慨ひとしおです。ここでカシミヤの集毛業者の劉さんと合流し、劉さんの先導で牧民の杜さんの自宅兼放牧地へ向かいます。

しばらく走って先導の劉さんの車がいきなり舗装道路を外れて半砂漠の中に入り入れます。車の轍がかすかに残る砂の中に車が入ると頭が車の天井につくぐらいにゆれる道なき道です。

それにしても広大な砂漠の中に牧民の家を探すのは劉さんの案内なしでは絶対に不

可能です。

迎えて頂いた杜さん夫婦は父親の代からカシミヤの牧民をやっているという。広い半砂漠の中のぼつんと一軒家。家の外壁は煉瓦積みで簡素だけれど家の中は思ったより明るい。

杜さんの家族は4人。小中の2人の女の子は学校が遠くここからは通えないので寄宿舎に入って週末に帰ってくるのを楽しみにしている。目を細めます。山羊のミルクの入ったお茶と羊の油で揚げたという『かりんとう』で迎えていただく。なかなかの美味です。カシミヤの収穫は年に一度。杜さん夫妻にとつて今が一番忙しいときなので、日本からのお土産を渡し、早速カシミヤの採毛を見せていただく。

杜さんが、「じゃあ」と言いながら、もこもこのカシミヤの足をひょいとつかみ左右の前足と左右の後ろ脚をアツと言う間に縛ります。カシミヤはビックリして足をバタバタさせます。私も驚き、「なんで縛るんだろっ」と思います。がすぐに静かになりました。

カシミヤの採毛はバリカンで刈る羊の毛刈と違って熊手のような道具で長い剛毛の内側にあるうぶ毛を梳きとるんです。チルーのようにカシミヤを殺す最悪のことではないことは解つたけど、今度は毛を梳かれるカシミヤが痛がるんじゃないかと心配だけど、カシミヤはとてもおとなしい。 つづく



いまだにあの味は忘れられないというスパゲッティがあります。それはスパゲッティアラ ポングレーことアサリのスパゲッティです。この頃はバスタと言われ、スパゲッティと言うと「古い」と言われてしまいましたが、スパゲッティはバスタの一種ですよ。 「なあんだ、バスタか」と、言われるかもしれませんが私には忘れられない味と体験でした。

今から約四十五年も前のローマ。前職の旅行屋での三回目のヨーロッパ添乗で、十五名ぐらいのグループでした。その日は自由行動でしたがメンバーの希望で小旅行をすることに。ローマ郊外のチボリ公園を訪れました。噴水の公園と呼ばれるぐらいに、森の中の公園のそこらじゅうに多くの噴水が湧き出る素晴らしい景観にみんな大満足。その帰りに、せっかくイタリアに来たんだから本場のスパゲティを食べたいということで、地元というドライバーのマリオさんに案内してもらいました。

「マリオさんのお勧めのお店を紹介してほしい」と言う嬉しそうに親指を上げて「世界一美味しいスパゲッティのお店に連れて行ってあげる！」と胸をたたきました。その明るく大袈裟な様かいかにもイタリア人と実感しました。トラットリアで庭にはぶどう棚のテラスが設けられていました。青い実のブドウがたわわに下がってブドウ棚が天井になった素敵な店でした。

「メートルもある大きな窯でゆがれた大量のスパゲッティ。絶妙なゆで加減(アルデンテなんて洒落た言い方は当時は知りません)。アサリとガーリックの香ばしい香り。本場のイタリアで頂いているという嬉しさ。このスパゲッティ・アラ・ポングレーは私の人生で最も美味しかったスパゲッティです。覚えてたのイタリア語の、ボリー・ボリー(美味しい)や、タントタント! (沢山)を連発しみんな大満足。お腹いっぱいになり他は何にも食べられなくなりしました。

後日、スパゲッティは前菜でその後にメインを食べるとガイドさんに教えられ、「きつと、主飯も食べないで、スープだけで帰った変わった客だった」と首をすくめました。旅行屋になりたてのその頃は、庶民的なトラットリアと高級なレストランの違いも知りませんでした。流石ベテランドライバーのマリオさん、スパゲッティを食べたいという僕らを見抜き、分相応のカジュアルなお店に連れて行ってくれたんですね。 お店に迷惑をかけたわけではないと思いますが、「エッツとか、あゝあ」という、今思えば「知らぬが仏」の色々な間違いをしかして、多くの人に助けられていたんだと思います。こんな経験で、インパウンドの外国人の失敗は笑えませぬ。

思い出のホテルを旅する(七十)

元 旅行屋のお勧め ミラノ・イタリア

ヒルトンホテル ミラノ

1970年当時ファッション業界は景気が良いというので、ヨーロッパのファッション事情を視察するツアーを企画しアプローチをかけて、1974年、2年越しのセールスが実を結びツアーが実現しました

当時の旅行屋の醍醐味は、航空会社はもちろん、ホテル、食事、観光、移動など旅行のほぼすべてをお客様と一緒に企画し、自分で添乗するというものでした。好きな旅行を企画して実行し、お金を頂けるんですから。旅行好きにはこれほど楽しい仕事はありませんでした。 一番楽しいのは旅程作りです。お客様の了解さえ得られれば自分の望む通りに計画が作れました。

この旅の目的はファッションの視察。お客様の訪れたい都市は、ロンドン、パリ、ミラノ、ローマ。経路や手段などはお任せです。

東京からアラスカのアンカレッジ経由の北極ルートでロンドンへ。ロンドンを訪問し、パリへは飛行機で。ヨーロッパ内は、自分の好きな鉄道と決めました。

ヨーロッパのハイファッションに触れるには国際特急を是非体験してほしいとアピール。パリからミラノへの移動はT E E・ヨーロッパ国際特急チサルパンという名前の列車のファーストクラスのコンパートメントにしました。

お店のお休みが多い日曜日が移動日で、パリ・リヨン駅からスイスのジュネーブへ向かいます。

フランスの豊かな農村を抜けスイスのジュネーブを過ぎるとレマン湖畔を走ります。レマン湖の斜面は今では世界遺産になっている美しいブドウ畑。湖の中に建つ幻想的なシオン城の横を通り過ぎると間もなく大迫力のアルプスの岩山が迫ってきます。スイス・イタリア国境を世界一のシンプロントネルを抜けミラノへ。

フランス、スイス、イタリアの国境を列車で走り抜ける醍醐味。

島国日本では体験できない経験と、素敵な国際特急のファーストクラスのコンパートメントに、「ファッションの勉強になった」と、大好評でした。



ミラノの泊りは今回のヒルトンホテル ミラノ。ヨーロッパスタイルのホテルが良かったのですが、当時日本人のお客様は、部屋が狭めで重厚でちょっと暗い雰囲気、欧風ホテルは不評で、明るく広いアメリカンスタイルのホテルに慣れていた、欧風のホテルに時々クレームがきていたそうです。それを警戒してアメリカンスタイルの高級ホテルのヒルトンホテルにしてくれたそうです。 重厚な石造りのヨーロッパの街中に、ガラスを多用した建物に、場違いなアメリカを感じたホテルでしたが、ミラノ中央駅のすぐ近くで、明るく機能的でファッション街のモンテナポレオーネ通りにも近いナイスホテルでした